

平成 30 年 6 月 16 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26780426

研究課題名(和文)ルソーの女性教育論再考 宗教的世界観との連続性に着目して

研究課題名(英文)Reconsideration on Rousseau's theory of education for woman in "Emile"

研究代表者

田中 マリア (TANAKA, Maria)

筑波大学・人間系・准教授

研究者番号：20434425

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ルソーの教育思想について、とりわけ、これまで概して、フェミニズム論やジェンダー論との関係において批判されることの多かったルソーの女性教育論を再考した。ルソーの宗教観や倫理観の文脈に即して再考した結果、それが単なる男性優位論とは一線を画するいわばケア的なもの、それはまさに「女性の道徳的卓越性」について言及した、「もうひとつの声」として読まれるべきものであることを明らかにした。ただし、それは必ずしも女性をケア的な存在と規定し、固定的な性役割の枠でとらえているものでもないこと、性に対するルソーのとらえ方はもっと複雑で多様なものであった可能性が高いことなどについても言及した。

研究成果の概要(英文)： This study reconsiders Rousseau's theory on education for women in "Emile". 'Women's education' found in Chapter 5 of "Emile" has been largely criticized in the view of feminism and gender theory. On the other hand, this research clarified the educational significance through examination of Rousseau's view of religion and ethics.

Firstly, this part should not be understood as a theory of male dominance, but to be understood as "another voice" that argue "women's excellence" based on 'care ethics'. Secondly, 'care ethics' are not necessarily regarded as a fixed role for women. Finally, Rousseau's theory about sex is more complicated and diverse.

研究分野：教育学

キーワード：ルソー 女性教育 宗教的世界観 ケア的な倫理観

### 1. 研究開始当初の背景

ルソー (J.J.Rousseau, 1712-1778) の女性教育論は主に、『エミール』第 5 編の前半部分において展開されているが、『エミール』はこれまで概して、アンシヤンレジームからの脱却、キリスト教的世界観との断絶的な側面が強調されるかたちで理解される傾向が強かった。『エミール』には第 4 編に道徳と宗教に関する考察が、また第 5 編に女性と政治に関する考察が見られるが、理性的で合理的な近代市民形成論として本書を理解しようとする流れの中では、第 4 編の宗教論と第 5 編前半部分の女性教育論は十分検討が深められることなく、もっぱら第 5 編後半部分の政治論との関係において評価されてきた。

近年、第 4 編の宗教教育論に関しては捉え直しがはかれるようになってきたが、第 5 編前半部分の女性教育論に関しては、いまだ十分検討がなされているとは言い難い。そのような状況の中でこれまでルソーの女性教育論は、女性解放運動の文脈において、女性を家庭に閉じ込める前近代的で保守的な思想、男性優位論者の教育論として極めて低い評価がなされるか (ウルストンクラフト、バダンテール、水田珠枝)、反同化主義的平等論の立場から、その反差別性が強調・擁護されるか (ホフマン、吉澤昇)、立場の違いはあるにせよ、もっぱらフェミニズム論やジェンダー論との関係において分析され、批評されてきた。

それに対し、本研究は『エミール』それ自体の構想を、第 4 編を中心とした「宗教を基盤に据えた人格形成論」として捉え直したとき、第 5 編前半部分において展開される女性教育論に関しても、従来とは異なる新たな解釈の可能性が開かれていることを明らかにしようとするものである。

女性解放運動の流れの中で、ともすると前近代的で保守的といったネガティブな側面が強調されるかたちで捉えられてきた『エミール』第 5 編の女性教育論について、まずは『エミール』に関して、そこに宗教的世界観との連続性があるとの見方に立ち、続編『エミールとソフィ』まで含めた統一的解释を踏まえた上で、改めてルソーの女性教育論について再評価しようとするところに本研究の学術的な特色がある。

とくに、『エミール』の市民モデルを、理性的かつ合理的な近代市民モデルではなく、敬虔的で宗教的な近代市民モデルとして理解した上で、その伴侶として描かれる女性モデルを再考しようとするところに本研究の独創的な点がある。本研究において、ルソーの女性教育論を近代合理主義的な枠組みからではなく、宗教的な世界観から解明しようとすることは、今日、我が国における性のとらえ方や性教育の問題を見直す意味でも、現代的意義を有した極めて重要なテーマであると考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究は、近代教育思想の祖と評されるルソーの教育思想について、とりわけ、これまで概して、近代啓蒙主義的ヒューマンイズムの流れの中で合理主義的に解釈されることの多かった『エミール』に関して、宗教的世界観との連続性に着目しつつ全体を捉え直したとき、従来、フェミニズム論やジェンダー論との関係において批判されることの多かったルソーの女性教育論がいかなる教育的意義を有していたのか改めて考察することを目的とする。とくに本研究では、エミールを理性的、合理的な近代市民モデルでなく、理性的でありながらも敬虔的で宗教的な人格を有する近代市民モデルとして捉えたときの、エミールにとっての教育的意義と、ソフィ自身 (女性) にとっての教育的意義の両面について明らかにしたい。

### 3. 研究の方法

本研究は、宗教的世界観との連続性に着目しつつ全体を捉え直したとき、従来、フェミニズム論やジェンダー論との関係において批評されることの多かったルソーの女性教育論がいかなる教育的意義を有していたのか改めて考察しようとするものである。この着想は前述のごとく、ルソーの教育思想について、彼の宗教論、言語論、音楽論、植物論といった著作群にまで視野を広げ、より横断的に『エミール』を捉えようと試みてきたことによって得られたものである。そこで、本研究においても基本的には横断的な文献検討を試みることで新たな解釈の可能性を探ることとする。とくに本研究では、2012 年度に臨席したルソーの生誕 300 年記念行事の数々で得られた知見、例えば、植物学研究成果として性の問題を捉え直す視点や魂の領域における性の問題を捉え直す視点など本研究にとっても有力な知見、も加味しながら分析を加えることとする。

### 4. 研究成果

考察の結果、最終的に以下のような点を中心に論をまとめた。

ルソーは第 5 編の女性に関する論考を通して、普遍的な正義論ではひろいきれず、むしろこぼれ落ちてしまうところのもの、それはケアリング的とでもいってよいような価値の重要性を論じていたものと考えられる。ルソーはそうした全く異なる価値を、全く異なる方法によって描いてみせたうえで、さらにそれら対立したりどちらか一方にのみ込まれたりするような類のものではなく、全く比較することのできない同等の価値を有する類のものであることにも言及していた。ルソーは男女が協力し合い、これら二つの価値が調和されたとき「一個の道徳的人格 (une personne morale)」が生じると述べて、男女の相互関係を驚嘆すべきものと高く評価していた。

第5編において展開されるルソーの「女子教育論」はまさに「女性の道徳的卓越性」について言及した、「もうひとつの声」として読まれるべきものである。このことは、女性に関するルソーの論考やソフィの登場が第5編の前半に置かれていることの意味を考える上でも重要な点である。

第5編の前半は、第4編の道徳教育の開始とともに始まった宗教論の延長にあり、政治論が展開される前の箇所である。エミールは普遍的な国家、公正な価値を志向するであろう。しかし、その道徳性は抽象的な正義のために具体的な眼の前の他者の感情をないがしろにするようなものであってはならない。つまり、エミールは政治形態や社会論を学ぶ前に具体的な他者と関係をつくり、眼の前の誰かの感情に共感できる道徳性を獲得しなければならないのであり、エミールがそのような特性を開花させるのは、ソフィを媒介としてなのであった。ソフィと出会うことによってエミールの道徳性は観念的なものからより実践的なものへと近づいていく。その重要性を考えればエミールにとってのソフィの登場は、第5編の前半、道徳論、宗教論の延長にあり、かつ政治論の前でなければならなかったのである。

このように、ルソーの女子教育論を『エミール』の全体構想に戻して、つまり、ルソーの教育論や倫理観などの文脈に即して再考し、それが単なる男性優位論とは一線を画するものであることを明らかにしたわけであるが、それを踏まえて改めて問題として立ち現れてきたのが、このような考え方がそれはそれで女性をケア的な存在と規定し、ケア的な役割期待へと絡めとっていつてしまうことになるのではないかといった問題であった。

果たして、両者の特性はルソーの中でどこまで固定的なものとしてとらえられているのであろうか。両者が入れかわることはまったくないのであろうか。まったく変わらず相補完的関係、役割分業的な関係のまま固定されることになるものなのであろうか。この点に関して言えば、まったく変わらず相補完的関係、役割分業的な関係のまま固定されるというのは考え難いという結論が導きだされた。『エミール』には、強く魅かれあっているソフィとエミールは、長く一緒にいればいるほど、お互いの性質に何らかの影響を与えずにはおかないといった趣旨の論が見られる。また、ルソーは、人間が自然に与えた能力のひとつとして「自己改善可能性 (perfectibilité)」に着目していた。よくも悪くもこの能力があるから人間は社会の中で変質するのであって、両者の関係にあってはお互いこの変化をもたらさないはずがないのである。

ルソーは、ソフィと出会うことによってエミールの「最終的な形が決まる」と述べている。同様にエミールの内面に対するソフィの

影響が決して小さいものでないことは「女性によって、男性の品行、情念、趣味、楽しみ、幸福そのものさえも左右される」といったような文言にもあらわれている。

さらに言えば、先に述べた「一個の道徳的人格」への言及が、第5編、女性に対する宗教教育論の中であることも、この点について考える上で一考に値するものと思われた。何故ならば、女性の語る敬虔で喜びに満ちた信仰心や愛情が、規則や秩序ばかり優先しがちな男性の心に人間的な感情を呼び覚ませ、愛情の連鎖をもたらす、といったモチーフは、ルソーが著作の中で好んで用いたものだからである。

例えば、『新エロイズ』では、感じやすい心と敬虔な信仰心をもったジュリと、強い倫理観をもち公正や秩序を愛するが無神論者で愛情も理性的であるヴォルマルを対比的に描かれており、そこでは、信仰深いジュリが無神論者ヴォルマルを回心させるのではないかと思わせるような結末が用意されている。また、第5編のソフィの信仰心も両親の「感情 (ces sentiments)」からもたらされたものであった。

そもそもルソー自身がヴァラン夫人を媒介にして神秘主義的あるいは感覚的世界観に目覚めていったことが『告白』で触れられている。このように、ルソーの著作の中にはケアの連鎖ともいべき愛情の連鎖が認められる。そうしてみると、ソフィの存在は単にエミールの手足となり彼を補佐する役割以上の存在、それはエミールの中にソフィ的な世界を形成させる動因としての存在とみることができるのではないだろうか。そして、それはまたエミールからソフィに対しても言えることである。

第5編には、エミールがソフィを通じて、共感的な道徳世界に、ソフィはエミールを通じて普遍的な道徳世界に足を踏み入れていくのではないかということを感じさせるような記述も見られた。例えば、エミールはソフィに「哲学、物理、数学、歴史、一言で言えば、一切のこと」について彼女に講義をしている。ソフィはかれの熱意に喜んでついていき、そこから利益を得ようと努力する。とくにソフィは「倫理 (la morale)」と「趣味 (les choses du goût)」に属するものについてもっとも著しい成長を遂げる。

こうして、お互い魂の結びつきを果たした両者の道徳的性差は少しずつその区別がいまいなものになっていくものと思われる。そうしてみると、「一個の道徳的人格」が生じるというのは、二人でひとつではなく、それぞれの中に統合的人格が生成され得るということをおもうとしていたものと考えられる。男女が融合を果たしたとき、両者お互いのなかで「一個の道徳的人格」が誕生し、そうなったとき、男女の道徳的な性差はほとんど消滅するのではないだろうか。

このように考えるとき、男女の融合による

性差の消滅の可能性に関して、ルソーがどのように考えていたのかについては今後、十分検討に値するものと思われる。ルソーは『エミール』第5編の冒頭において、性に属するものとそうでないものを決定することの難しさについて言及している。また、そこで描かれるソフィとエミールの特性の相違は、それ以前の男女モデルに比べ、差異性が極端に少なくなっている。

『新エロイズ』では、「われわれに異なる職業を定めているもの、それは自然それ自身です」と書かれているが、ロール・シャロンは、この箇所が草稿段階においては一度、「自然 (nature)」から「社会 (société)」に改められ、再び「自然 (nature)」に戻されている事実に触れている。そして、ルソーが「性の区別の起源に対する問いをまえに本質的なためらいをおぼえていた」のではないかと指摘している。

さらに、性に関するルソーの興味深い考察は、『植物用語辞典』の「花形装飾 (Fleuron)」においても確認される。「私の述べている花形装飾の通常の規則は、両性具有 (hermaphrodites) であり、彼らはそれ自身みずからによって受精している。しかしながら、そこには別のものもある。あるものは、おしべを有しているが胚子はなく、それは雄花 (mâles) と名づけられている。またあるものは、胚子を有しているがおしべを有していないもの、それは雌花 (femelles) と呼ばれている。また別のものは、おしべも胚子もなく、したがって、不完全な胚子がつねに発育不全になるもの、中性 (neutres) と名づけられているもの、である」ここからルソーが植物の世界における性的多様性、すなわち、雄、雌、両性具有、中性が存在することに関心を抱いていたことが伺われる。

『エミール』第5編において、ルソーは、「たぐいまれなもの (les prodiges) は問題にしない」と述べ、エミールを男、ソフィを女と定めて考察を始めているが、彼の思想の中にはもっと多様で複雑な性に関する考察が展開されていたものと考えられる。

以上、これまで日本における『エミール』への関心は概して、第1編から第3編まで、もっぱら消極的な教育方法や合自然の教育論といった内容に注がれてきた。また、ルソー自身の原著にはない「目次」を付し、ルソーの独特な言い回しや文体のせいで決して読みやすいとは言えない『エミール』の教育論を読者に親しみやすくした明治図書版『エミール』においても、第5編に関しては、ケア的な観点、つまりもう一つの道徳世界との融合、ケアの連鎖によってエミールが生まれ変わる場面、その意味におけるエミールの人間形成論の一部としてのとらえ方に基づく章立てには残念ながらなっていない。

また、ルソーの教育論に関してはこれまで『エミール』が代表的な古典として並べられてきたが、もうひとつ、女性の固有名詞がタ

イトルに付されている『新エロイズ、またはジュリの物語』もその傍らに並べられてしかるべきではないだろうか。『エミール』が男性を中心とした人間形成の物語としたら、『ジュリ』は女性の物語である。両方に光があてられることによって、「ひとつの道徳的人格」が姿をあらわすかもしれない。今後はこれらの著作群を包括的に考察していくことが課題であろう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

— 田中マリア、『エミール』の女子教育論再考、筑波大学道徳教育研究会、道徳教育研究、第19号、2018年、pp.17-30、査読無

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 マリア (TANAKA, Maria)

筑波大学・人間系・准教授

研究者番号：20434425